

教 育 研 究 業 績

2021年 5月 1日

氏名 吉田 富二雄

学位: 博士 (心理学)

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
心理学 社会心理学	社会心理学 集団心理学 人格心理学 心理統計法 潜在認知 Internet	
主要担当授業科目		
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 ①		
2 作成した教科書・教材 1) 新編社会心理学 (共編著)	平成9年6月	社会心理学全領域をカバーした標準的な教科書であり、個人内過程、対人行動と対人関係、集団、社会心理学の研究手法の4部から構成されている。吉田は集団過程を担当し、自身も集団心理学概説を分担執筆した。内容的には (1)集団の意味(2)集団の中での課題遂行(3)集団の意思決定ー集団極化現象と集団愚考(4)リーダーシップと集団の機能を基本テーマに、社会心理学の重要なトピックスとその意味を解説。267頁 本人担当部分 pp. 205-224. 「集団と個人」 堀洋道・山本真理子・吉田富二雄 (編著)
2) 心理測定尺度集Ⅱー人間と社会のつながりをとらえる<対人関係・価値観> (共編著者)	平成11年6月	1990年から1999年までに公刊された、対人行動と価値観に関する尺度56本を選び、尺度の①構成概念・対象者、②作成過程、③信頼性/・妥当性、④尺度の特徴と採点方法、⑤出典論文・関連論文等を解説した心理測定の尺度集。 (堀洋道監修, 吉田富二雄編著)
3) 新編社会心理学 [改訂版] (共編著者)	平成22年2月	1997年に刊行した新編社会心理学の改訂版。13年の間に社会心理学が大きく進歩した部分を全面的に書きかえて刊行。 吉田富二雄・松井豊・宮本聡介 (編) 堀洋道 (監修)
4) 心理測定尺度集Ⅴ : 個人から社会へ<自己・対人関係・価値観> (共編者)	平成23年3月	2000年から2010年までに公刊された、自己と対人関係・対人行動と価値観に関する尺度50本を選び、尺度の①構成概念・対象者、②作成過程、③信頼性/・妥当性、④尺度の特徴と採点方法、⑤出典論文・関連論文等を解説した心理測定の尺度集。 (堀洋道監修, 吉田富二雄・宮本聡介 編)

3 当該教員の教育上の実績に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		
①文部省大学設置・学校法人審議会の教員審査	平成12年8月	筑波大学大学院人間総合科学研究科心理学専攻博士課程「研究指導」担当教授として以下の授業科目に（D○合）の認定を受ける。 ①集団心理学特講、②集団心理学演習、③心理学セミナー、④心理学実験実習。
②独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員	平成15年1月～平成15年12月	科学研究費委員会専門委員として、研究費配分のための審査を行った。
③文部科学省科学技術・学術審議会専門委員	平成20年12月～平成22年1月	科学研究費補助金審査部会・実験社会科学専門委員会委員として、科学研究費補助金配分のための審議および評価を行った。
④独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員	平成23年6月～平成23年10月	第三部会 社会科学小委員会委員として科学研究費補助金の配分審査を行った。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1. 資格、免許 中学校教諭1級普通免許状（数学）（昭50中1普第16180号） 高等学校教諭2級普通免許状（数学）（昭50高2普第17463号）	昭和50年3月 昭和50年3月	
2. 特許		
3. 実務の経験を有する者についての特記事項		
4. その他		

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の 年月	発行所、発表 雑誌等又は 発表学会等 の名称	概 要
(著書) 1) 発達心理学への招待 6 ひととのふれあい 2) 現代社会心理学 3) 心理学フロンティア 金子隆芳 (監修) 4) 心理尺度ファイル 5) 「新編社会心理学」 (再掲)	共著 共著 共著 共著	昭和 58 年 7 月 昭和 63 年 6 月 平成 4 年 3 月 平成 6 年 4 月 平成 9 年 6 月	新陽社 教育出版 教育出版 垣内出版 福村出版	<p>発達心理学への招待 6 ひととのふれあい 永野重史・依田明 (編) 著作者は永野重史他 16 名、224 頁。 原野広太郎・吉田富二雄担当部分は「パーソナル・スペース」Pp. 92-11. (協議しての共同執筆) パーソナル・スペース概説。(1) <なわばり>あるいは親密なコミュニケーション空間としての個人空間 (2) 発達的にみた個人空間(3) 個人空間の構造(4) 性格特性と個人空間 (外向-内向、犯罪者、精神分裂病者) のながれにそって個人空間の心理的意味と特性を分析した。</p> <p>竹村研一 (編)。著作者は竹村研一他 14 名。189 頁。 吉田担当部分は「小集団」pp. 137-154. (1) 小集団研究の背景と方法-集団力学の成立とアクション・リサーチの方法- (2) 課題達成のための集団決定の効果 (3) 集団の機能-①社会的促進と社会的抑制 ②集団規範と同調性 (4) リーダーシップの機能とスタイルの流れに沿って小集団の研究方法とその主な成果を検討した。</p> <p>著作者は金子隆芳他 35 名、271 頁。 吉田担当部分は「協力と競争は両立するか」pp. 200-207. 囚人のジレンマの実験ゲーム研究を基に、対人葛藤と対人交渉・戦略を概説した。具体的には、(1) 囚人のジレンマ・ゲームとは何か? (2) 最適な戦略とは…コンピュータ選手権(3) 対人関係への示唆(4) 裏切りは人間観・社会観を変える、の流れに沿って、有効な対人戦略とその意味について論じた。</p> <p>堀洋道・山本真理子・松井豊 (編) 652 頁。 著作者は堀洋道他 17 名 吉田担当部分は「心理尺度の信頼性と妥当性」pp. 621-635. 心理尺度の基本的要件である信頼性と妥当性について、その意味と測定方法を解説した。具体的には、(1) 信頼性、①測定モデル②信頼性係数の定義と推定③再テスト芳・代替形式法・折半法・内的整合性・α 係数、(2) 妥当性①基準関連妥当性②内容的妥当性③構成概念妥当性、等の流れに従って論述した。</p> <p>堀洋道・山本真理子・吉田富二雄 (編) 著作者は堀洋道他 17 名。267 頁。 吉田担当部分は「集団と個人」pp. 205-224. 集団心理学概説。(1) 集団の意味(2) 集団の中での課題遂行(3) 集団の意思決定-集団極化現象と集団愚考(4) リー</p>

6) 心理測定尺度集Ⅱ —人間と社会のつながりをとらえる<対人関係・価値観> (再掲)	共著	平成 13 年 6 月	サイエンス 社	ダーシップと集団の機能を基本テーマに、集団心理学の重要なトピックスとその意味を解説した。 堀洋道監修，吉田富二雄編著。463 頁。 著作者は堀洋道他 14 名。1990 年から 1999 年までに公刊された、対人行動と価値観に関する尺度 56 本を選び、尺度の①構成概念・対象者、②作成過程、③信頼性/・妥当性、④尺度の特徴と採点方法、⑤出典論文・関連論文等を解説した心理測定の尺度集。吉田は「信頼性と妥当性一尺度が備えるべき基本的条件一」(Pp. 436-453) を執筆した。
7) Anger expressive behaviors and their inhibitory factors in Japanese junior high school students: From the aspect to narcissism and norms.	共著	平成 19 年	New York: Nova Science Publishers,	Hibino, K., Yukawa, S., Kodama, M., & Yoshida, F. In T. C. Rhodes(ed.), Focus on Adolescent Behavior Research. Pp. 119-132. 公立中学生 3339 名を対象に行った、怒りの沈静化過程と抑制要因に関する調査結果の英語版。友人関係への配慮や損得を意識することが抑制要因として選択され、また実際に、男子では損得意識が、女子では規範意識が、怒り表出行動に対して抑制的効果を示していた。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
8) 新編社会心理学 〔改訂版〕 (再掲)	共著	平成 22 年 2 月	福村出版	吉田富二雄・松井豊・宮本聡介(編) 堀洋道(監修) 著作者は堀洋道他 14 名。1997 年に刊行した新編社会心理学の改訂版。13 年の間に社会心理学が大きく進歩した部分を全面的に書きかえて刊行。
9) 心理測定尺度集Ⅴ： 個人から社会へ<自己・対人関係・価値観> (再掲)	共著	平成 23 年 3 月	サイエンス 社	吉田富二雄・宮本聡介 編(堀洋道監修) 363 頁。 著作者は堀洋道他 15 名。2000 年から 2010 年までに公刊された、自己と対人関係・対人行動と価値観に関する尺度 50 本を選び、尺度の①構成概念・対象者、②作成過程、③信頼性/・妥当性、④尺度の特徴と採点方法、⑤出典論文・関連論文等を解説した心理測定の尺度集。
〔学術論文〕 1) 社会的相互作用場面における対人認知の研究 (1) —ゲーム行動の分析を通して—	単著	昭和 53 年 8 月	実験社会心理学研究 18, 11-20	囚人の Dilemma Game を社会的葛藤場面のモデルとして、競争状況に<引き込む—引き込まれる>という型の二者相互作用と対人認知の変容過程を分析。相手を競争状況に引き込む側(競争者)と引き込まれる側(協力者)は、各々の役割に応じて、前者は、相手と自己を類似した意図の持ち主として、後者は、自己と相手を異質な者として、相異なる対人認知を形成する。力動的な対人関係論の枠組みから社会的相互作用を考察。8 頁。
2) 大都市高校生の家庭環境に関する考察	共著	昭和 55 年 3 月	筑波大学心理学研究 2, 65-79	堀 洋道・吉田富二雄 昭和 53 年度東京都青少年問題調査データを再分析し、心理的特性・問題行動念慮・社会観・性意識・非行に対する態度と家庭環境との関連を考察。その結果、「拒否」的・「干

				<p>渉」的家庭環境の持つ問題性が、精神的疲労・孤独・耐性欠如等のネガティブな心理特性、家出・退学・自殺・暴力などの問題行動傾向、そして「愛がなくとも性行為があつてよい」という性意識と結びつく形で浮き彫りにされ、家庭環境の重要性が再認識された。15 頁。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
3) 現代青年の社会認知と社会イメージ	共著	昭和 55 年 9 月	年報社会心理, 21, 189-202	<p>高木秀明・吉田富二雄・加藤隆勝 現代青年の社会観（現在の社会・望ましい社会）を認知的側面と情緒的側面から分析。認知面では、社会的平等・社会的連帯・個人の自由などの 3 尺度を構成し、情緒的面は「前向き一後向き」等の Semantic Differential 尺度を用いた。その結果、現代青年が現実の社会に対する充実感を高めている点、望ましい社会に対して明確なイメージを持ちえていない点が示唆された。14 頁（共同研究・執筆・執筆につき本人担当部分の抽出不可能）</p>
4) 自然面接場面における視線行動の分析	共著	昭和 56 年 2 月	実験社会心理学研究 20, 109-118	<p>吉田富二雄・飯田哲也 対人場面における非言語的表出行動としての視線行動を分析。視線行動は情報探索（相手の意図を窺う）と内的表出（自己の内面を隠したり現したり）の二重の機能的特性を有し、会話の変化や話者の交代などに応じた独自のパターンを示し、話の流れを調節することを明らかにした。性格的には不安傾向の強い者の視線活動性は低く、会話も単調になりやすい。10 頁（共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能）</p>
5) 他者接近に対する生理・認知反応 —生理指標・心理評定の多次元解析—	共著	昭和 56 年 8 月	心理学研究 52, 166-172.	<p>八重沢敏男・吉田富二雄 未知の他者に対する対人的緊張や不安を、生理レベル（心拍・瞬き）と意識レベル（不安・緊張の評定尺度）から実験的に分析した。更に INDSICAL（多次元尺度構成）を用いて両者（心理レベルと生理レベル）の関連を検討し、神経質傾向の強い者が、自己の生理反応に比較して、過剰な不安や緊張を他者や場面に結びつけやすいことを見出した。7 頁。（共同研究・執筆につき担当部分の抽出不可能）</p>
6). 現代青年における心理的特徴と生活行動の関連について	共著	昭和 57 年 2 月	筑波大学心理学研究 4, 49-60	<p>堀 洋道・吉田富二雄 昭和 53 年度東京都青少年問題調査データを再分析。ここでは青少年の生活時間・生活行動という具体的な日常行動の分析を通して現代青年の在り方にアプローチ。心理的特性項目のパターン分類（数量化Ⅲ類）の結果、「不適応感大—小」「成熟—未成熟」「自己顕示性大—小」の基本軸を導き、家庭・学校・盛り場等の領域における生活行動・生活時間（睡眠・テレビ視聴・雑誌接触時間）との関連を検討。 12 頁。（共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能）</p>

7) 社会的相互作用場面における対人認知の研究(2)－第三者の視点を加えて－	単著	昭和 59 年 2 月	筑波大学心理学研究 6, . 35-39	研究(1)の競争状況に<引き込むー引き込まれる>という相互作用を行なう当事者(協力者・競争者)に対して、ゲームの推移・結果の情報に基づいて判断する観察者(第3者)の視点を導入。第3者・協力者・競争者は各々の社会的立場(視点)に応じた独自のステレオタイプな対人認知を行ない、視点の違いにより異なった社会認識(対人認知)が生じることが示された。5頁。
8) 社会的相互作用場面における対人認知の研究(3)－集団のPDゲームの分析を通して－	単著	昭和 59 年 12 月	心理学研究 55, 282-288	個人間の相互作用を集団間の相互作用に拡張。競争(非協力)指向グループと協力指向グループは囚人の Dilemma Game において<引き込むー引き込まれる>という相互作用を通して競争状況に陥る。そして前者は自己と相手を類似したものとして、後者は異質な者として、相異なる対集団認知を形成した。また、協力グループはゲーム結果に対して相手により大きな責任性を付与した。7頁。
9) ゲーム相互作用場面の対人(集団)認知における集団成極化効果－社会的相互作用場面における対人認知の研究(4)－	共著	昭和 61 年 2 月	心理学研究 56, 86-92	吉田富二雄・大本 進 競争状況へ<引き込むー引き込まれる>という相互作用において、引き込む側(競争者)を実験的に統制し、引き込まれる側(協力者)に個人と集団の条件を設定し、ゲーム行動および対人(対集団)において個人と異なる集団の特徴を検討した。その結果、(1)ゲーム行動では集団はより極端な行動をとりやすく、(2)対集団認知では、より強く自己と相手の異質性を意識し、集団成極化効果が検証された。 7頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
10) 生理反応・心理評定によるパーソナル・スペースの検討－慣れの過程の分析を通して－	共著	昭和 62 年 4 月	心理学研究 58, 35-41	吉田富二雄・小玉正博 神経質傾向の高低で2群を設定し、未知の他者の接近に対する対人的緊張や不安を生理反応・認知反応の両面から、また、接近の繰り返しによる慣れの効果を中心に分析した。生理反応(HR)は他者接近の繰り返しにより速やかに慣れを示すが、心理評定(緊張や不安の評定値)は<言語による固定化>の作用を通して、“他者の接近とともに当然緊張も高まる”という被験者の推論に示唆されるパターンを示した。また神経質高群は低群に比較して、心理評定・生理反応ともに高い緊張を示した。7頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
11)行動の自己統制システムにおける感情－認知統制機能の役割(1)－感情－認知統制力尺度作成の試み－	共著	昭和 63 年 2 月	教育相談研究 26, 56-68 (筑波大学学校教育部・教育相談研究所)	小玉正博・吉田富二雄 神経症的不安など、感情－認知の自己統制感の喪失状態を検討するため、感情－認知統制力尺度を作成し、尺度の項目分析・信頼性・妥当性の検討を行った。 13頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
12)面接場面における非言語的コミュニケーション	共著	平成 1 年 4 月	心理学研究 59, 9-16	吉田富二雄・堀 洋道 面接場面における視線行動・しぐさ(頭を動かしたり、髪

<p>ヨンの表出 —視線行動の分析を中心として—</p>				<p>に手をやったり)等の非言語的表出行動を話題内容との関連で分析。また視線分析測度として話者交代の時点を中心に加算平均法を適用した局所的視線パターンを提唱。話題がプライベートなものになると、視線の交錯は減少し、自己の内面を隠そうとする傾向が高まる。また。逆に身振りやしぐさは多くなる。 8頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
<p>13) 視線遮断および仲間集団の存在がパーソナル・スペースに及ぼす効果</p>	<p>共著</p>	<p>平成 2 年 4 月</p>	<p>心理学研究 60, 53-56</p>	<p>吉田富二雄・堀 洋道 停止距離法を用いたパーソナル・スペースに関する2つの実験報告。第1実験では、被験者がサングラスやミラーグラスをかけることにより視線を遮断。第2実験では友人と3人1組でグループを作り、その空間配置を変化させる。そうした条件で未知の他者に対して“きづまり”と感ずる対人距離を測定。 4頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
<p>14) ゲーム相互作用における対人認知と対集団認知</p>	<p>共著</p>	<p>平成 2 年 5 月</p>	<p>心理学評論 32, 115-133</p>	<p>吉田富二雄・堀 洋道 PD game を葛藤的相互作用のセッティングとして、そこで生み出される心理過程(対人認知過程)の分析を行なった一連の研究に基づき、“実験ゲームの応用研究”の特徴および問題点を論議。19頁。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
<p>15) 社会的カテゴリー化による少数派および多数派集団の集団間差別行動—最小条件集団パラダイムを用いて—</p>	<p>共著</p>	<p>平成 6 年 12 月</p>	<p>心理学研究, 65, 346- 354.</p>	<p>吉田富二雄・久保田健市 Tajfel の最小条件集団パラダイムを用いた3つの実験により、集団間差別行動における社会的アイデンティティの役割を明らかにした。第1実験では、くじ引きを用いて、第2実験では、社会的態度により多数派と少数派を設定。第3実験では、再度の態度調査から転向派を導入した。その結果、自らの集団性(社会的アイデンティティ)を強く意識するに従い、内集団ひいき行動が現れ、また自らの集団性を脅かす転向派に対しては、多数派も少数派も強い差別行動を示した。 9頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
<p>16) 作業空間の配置が課題遂行に及ぼす効果</p>	<p>共著</p>	<p>平成 7 年 2 月</p>	<p>筑波大学心理学研究, 17, 135-142</p>	<p>吉田富二雄・澤田幸枝 オフィスの作業環境として、集団・単独・衝立(衝立で仕切られた空間)の3作業条件を設け、52人の被験者に5種類の課題(手作業・連想・論述課題など)を行わせ、また質問紙で作業環境について尋ねた。単純課題では集団条件がもっとも作業量が多く、作業内容の独自性の点では単独条件の評価が最も高い。衝立条件は作業量や内容で中間に位置するが、開放感・安心感・居心地の作業環境の点で高い評価を得た。 9頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>

17) 少数派および多数派 集団の集団間差別と態度の類似性 -最小条件 集団パラダイムを用いて-	共著	平成 7 年12月	社会心理学 研究, 11, 116-124.	久保田健市・吉田富二雄 最小条件集団パラダイム実験において, 集団所属 (多数派, 少数派) に加えて, 社会的態度の類似性の要因 (内集団類似性と外集団類似性) が操作され, 集団間差別行動が測定された。内外集団にかかわらず類似した集団成員をひいきし, その傾向は多数派で顕著なことが明らかにされた。9 頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
18) 2 PDゲーム状況に おける協力と競争の変容 -社会的相互作用場 面における対人認知の 研究(5)-	共著	平成 8 年2月	筑波大学心 理学研究, 18, 165-173.	吉田富二雄・安念保昌 予め, PD game の方針 (協調, 競争) を調査された 60 名の被験者が 15 試行の PD game を, ランダムに相手を変え 4 回行い, 最後に再び方針選択を行った。その結果, (1) 4 試合を通じて, 協調者は競争者より高い得点を示し, 適応的であったこと。(2) 競争者は, 協調者には勝ったが, 競争者とは共貧状況に陥り, 低い得点しかあげられなかった。(3) ゲーム終了後, システム全体で見た限り, 協調者と競争者の割合は変化しなかったこと, 等が明らかにされた。9 頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
19) 暴力映像が視聴者に 及ぼす影響—実験研究 の検討—	共著	平成 9 年2月	筑波大学心 理学研究 19, 175-185	湯川進太郎・吉田富二雄 暴力映像が攻撃行動に及ぼす影響に関する従来の実験研究を概観した。前半では, 映像特性を操作・した研究に注目し, これまでの研究知見を実際の映像に当てはめた場合には促進・抑制要因が複雑に交錯するために正確な予測が困難であることを指摘。後半では, 実験研究における攻撃行動の測定方法をまとめ, 近年, 認知や情動 (感情, 生理) への影響が注目されつつあること論じた。9 頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
20) 暴力映像と攻撃行 動: 他者存在の効果	共著	平成 10 年3月	社会心理学 研究 13, 159-169	湯川進太郎・吉田富二雄 暴力映像視聴時に存在する他者が認知・情動 (感情, 生理) ・攻撃行動に及ぼす影響について実験的に検討。研究 1 では, 他者の存在はポジティブな認知や感情の喚起し, ネガティブな感情を抑えること, 研究 2 では, 他者の肯定的な反応が攻撃行動を促進することを示した。11 頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
21) 黒い羊効果 (black sheep effect) -社会的 アイデンティティの脅 威となる内集団成員へ の差別現象—	共著	平成 10 年2月	筑波大学心 理学研究 20, 163-171.	大石千歳・吉田富二雄 本研究では, 黒い羊効果研究をレビューし, 内外集団成員のスキーマに基づく説明の問題点を指摘すると共に, 匿名の内集団成員でもひいきされる “内集団ひいき” との関連を検討し, 集団内での成員のひいきと差別の問題を論議した。9 頁。(共同研究・執筆につき担当部分の抽出不可能)
22) プライベート空間の 心理的意味とその機能 —プライバシー研究の 概観と新たなモデルの	共著	平成 10 年2月	筑波大学心 理学研究 20, 173-190.	泊 真児・吉田富二雄 プライバシーに関する諸研究領域を概観。従来, 心理学では個人特性としてのプライバシー志向性が主に検討されてきた。本稿ではプライバシー確保の機能に注目し, 「プラ

提出一				イベート空間」の概念と新たなモデルを提出した。 18 頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
23) 暴力映像が視聴者の感情・認知・生理反応に及ぼす影響	共著	平成 10 年 6 月	心理学研究 69, 2, 89-96	湯川進太郎・吉田富二雄 “暴力性”と“娯楽性”の観点から暴力映像を分類し、認知や情動に及ぼす影響について実験的に検討した。その結果、暴力性の高い暴力映像はネガティブな認知や感情（不快感情思考、不快感情、虚無感情）を、一方、娯楽性の高い暴力映像はポジティブな認知や感情（快感情思考、快感情）を強く喚起することが明らかとなった。8 頁。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
24) 暴力映像が攻撃行動に及ぼす影響—攻撃行動は攻撃的な認知および情動によって媒介されるのか?—	共著	平成 11 年 6 月	心理学研究 70, 94-103	湯川進太郎・吉田富二雄 “暴力性”と“娯楽性”の観点から暴力映像を選択し、認知・情動・攻撃行動に及ぼす影響について実験的な検討を行った。従来の実験研究との比較から、視聴前の挑発によって喚起される怒りの感情が攻撃行動の不可欠な要因である可能性を指摘した。10 頁。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
25) プライベート空間の機能と感情及び場所利用との関係	共著	平成 11 年 6 月	社会心理学研究 77-89	泊 真児・吉田富二雄 従来のプライバシー概念を拡張した「プライベート空間」の社会心理学的機能を「感情」と「場所利用」の観点から分析。感情によって求められるプライベート空間の機能が異なること、そうしたプライベート空間の機能が特定の場所利用を通して充たされ、両者は相互規定的な関係を持つことを明らかにした。 13 頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
26). 暴力映像の印象評価と感情—映像の分類：暴力性と娯楽性の観点から—	共著	平成 12 年 3 月	筑波大学心理学研究 22, 123-137	吉田富二雄・湯川進太郎 人気の高い 58 種類の暴力映像を対象に、映像から受ける印象評価と視聴して生じる感情について分析した。暴力映像は印象評価の面から、残酷で衝撃的な“暴力性”の高い映像と残酷でなく虚構的で様式的な“娯楽性”の高い映像の 2 種類に分けられるとする分類モデルを提出した。また、暴力性はネガティブな感情と、逆に、娯楽性はネガティブな感情と相関があることを明らかにした。 15 頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
27) 暴力映像と攻撃行動：暴力性および娯楽性の観点による新たなモデルの提出。	共著	平成 12 年 3 月	心理学評論 42, 487-504	湯川進太郎・吉田富二雄 前半では、映像特性に関する従来の研究知見による厳密な予測の困難さを受け、これを解消するアプローチとして“暴力性”“娯楽性”による映像分類モデルを提唱した。後半では、メディア暴力に関する Berkowitz モデル（1984）に、“暴力性”“娯楽性”の観点を加え、「視聴前の怒喚起、かつ、“暴力性”の高い暴力映像の視聴が攻撃行動を促進す

28) 暴力映像と攻撃行動：怒り喚起の効果	共著	平成 12 年 3 月	筑波大学心理学研究 22, 139-149.	湯川進太郎・吉田富二雄 視聴前の挑発による怒り喚起の効果を実験的に検討。認知・情動は従来と一貫した結果が得られたが、攻撃行動については全般的に暴力映像を視聴した場合に抑制された。怒りを喚起させる挑発者と攻撃する対象者が別人物であったため、攻撃行動が準化されなかった可能性がある」と論じた。11 頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
29) 感情状態とプライベート空間の 7 機能 —場所利用を媒介として—	共著	平成 12 年 3 月	筑波大学心理学研究 22, 113-121.	泊真児・今野裕之・吉田富二雄 感情状態と場所利用およびプライベート空間機能との関係を分析。抑うつ感を抱く者は交友できる場所の利用が少ないこと、被拘束感を抱く者は 1 人になれる場所を利用して気分転換や情緒的解放を図ることは少ないことなどが明らかになった。 9 頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
30) 性格特性の Big Five とプライベート空間の 7 機能	共著	平成 13 年 2 月	社会心理学研究, 16, 147-158.	泊 真児・吉田富二雄 257 名の大学生が、性格特性の Big Five 尺度、プライベート空間利用尺度、日常活動について質問紙上で回答した。調和性や外向性などの性格特性の違いによって、生活時間の利用において、プライベート空間の 7 機能の占める割合が異なることが示された。 11 頁。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
31) 内外集団の比較の文脈が黒い羊効果に及ぼす影響 —社会的アイデンティティ理論の観点から—	共著	平成 13 年 2 月	心理学研究 71, 445-453.	大石千歳・吉田富二雄 好ましくない内集団成員が差別される「黒い羊効果」に関して看護学生を対象に一連の仮説を検証した。その結果、黒い羊効果は、(a)内-外集団の比較の文脈があるとき、(b)内集団への同一視の強い成員において、顕著に見られることが明らかになった。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
32) 黒い羊効果と内集団ひいき —理論的検討—	共著	平成 13 年 2 月	筑波大学心理学研究, 23, 75-85.	大石千歳・吉田富二雄 好ましくない内集団成員が好ましくない外集団成員より厳しく差別される「黒い羊効果」、および内集団ひいき現象について、社会的アイデンティティ理論の観点から考察した。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
33) 暴力テレビゲームと攻撃：ゲーム特性および参加性の効果	共著	平成 13 年 2 月	筑波大学心理学研究, 23, 115-127.	湯川進太郎・吉田富二雄 第 1 研究 (調査) では、人気のある 12 の暴力的ゲームを、役割同化性と刺激反応性の 2 つの観点から分類した。第 2 研究では、代表的な役割同化型ゲームと刺激反

<p>34) アメリカ人大学生におけるプライベート空間7機能 —電子調査法を用いて—</p>	<p>共著</p>	<p>平成 13 年 2 月</p>	<p>筑波大学心理学研究, 23, 99-114.</p>	<p>応型ゲームを用いて、暴力的ゲームがプレイヤーおよび観察者の認知・情動・攻撃行動に効果を実験的に検討した。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p> <p>泊真児・今野裕之・吉田富二雄 プライベート空間7機能(緊張解消・集中・内省、コミュニケーション、気分転換・情緒解放・自己変身)と、感情状態による場所利用の関係について、アメリカ大学生76名を対象にInternet調査を行い、日米大学生の私的な時間・空間利用を比較検討した。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
<p>35) 暴力映像が攻撃行動に及ぼす影響 —挑発による怒り喚起の効果を中心として—</p>	<p>共著</p>	<p>平成 13 年 4 月</p>	<p>心理学研究, 71, 1-9.</p>	<p>湯川進太郎・遠藤公久・吉田富二雄 2001 暴力映像視聴(暴力性・娯楽性・統制)×視聴前挑発の有無の2要因実験計画で、暴力映像が認知・感情・行動・生理反応(心拍・瞬目)に及ぼす影響を検討した。 “暴力性”の高い暴力映像はネガティブな認知や感情を、一方“娯楽性”の高い暴力映像はポジティブな認知や感情を生じさせること、更に共分散構造分析により、挑発による怒りと映像の暴力性がネガティブな認知や感情を生み、最終的に攻撃行動につながる事が示された。9頁。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
<p>36) コンピュータネットワーク上における意思決定—集団成極化効果を用いて—</p>	<p>共著</p>	<p>平成 14 年 10 月</p>	<p>心理学研究, 72, 352-357.</p>	<p>白石崇・遠藤公久・吉田富二雄 15グループの4人討議集団を用いて、3つのコミュニケーション条件(対面条件、仕切り条件、コンピュータネットワーク条件)において集団成極化効果を比較検討。その結果、対面条件で極化効果がみられたが、相互圧力の弱いCMC条件では成極化効果はみられなかった。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
<p>37) 黒い羊効果と内集団ひいき —社会的アイデンティティ理論の観点から—</p>	<p>共著</p>	<p>平成 14 年 12 月</p>	<p>心理学研究, 72, 405-411.</p>	<p>大石千歳・吉田富二雄 2002 集団同一視の強いものほど強い内集団ひいきを示すこと、また、内集団ひいきの強いものほど好ましくない内集団成員をより厳しく差別すること(黒い羊効果)を看護専攻学生61名を対象として実験的に検証した。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
<p>38) 暴力映像の特性分析：表現特性および文脈特性が感情反応に及ぼす効果</p>	<p>共著</p>	<p>平成 15 年 1 月</p>	<p>社会心理学研究, 18, 127-135.</p>	<p>湯川進太郎・吉田富二雄 2003 選択された20の暴力映像を刺激として、暴力映像が視聴者に及ぼす感情的影響(快・不快・虚無感情)を、表現特性(娯楽性、暴力性)とストーリー特性(正当性の有無など)の側面から実験的に分析した。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>

39) 中学生における怒り表出行動とその抑制要因 —自己愛と規範の観点から—	共著	平成 16 年 1 月	心理学研究 76, 417-425.	日比野桂・湯川進太郎・小玉正博・吉田富二雄 本研究では、青少年の衝動的な怒り表出のコントロール方法を追求するために、中学生を対象に、怒り表出行動の抑制要因に注目し検討を試みた。その結果、友人関係への配慮や損得を意識することが、抑制要因として選択されていた。また、男子は損得意識のみが、女子は規範意識のみが、怒り表出行動に対して抑制的効果を示していた。なお、自分の気持ちを言葉で表現できることが、客体化の認知を介して、怒り表出行動を抑制していた。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
40) 怒り経験の鎮静化プロセスと怒りコントロール	共著	平成 16 年 2 月	筑波大学心理学研究, 31, 31-43.	日比野桂・吉田富二雄 本論文は、怒り経験後の行動とその効果、怒り表出行動の抑制要因、怒り経験後の鎮静化過程に関する研究知見を整理した。その上で、怒り経験後の鎮静化プロセスを、怒り経験直後、怒りの感情が緩和された時期（2-3 日後）、第 2 段階以降で怒り継続している時期（1 週間後）の大きく三つの段階にわけ、それぞれの段階について、感情・認知・行動の時系列的变化、攻撃行動の促進・抑制要因、攻撃行動への対処、の観点から整理した。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
41) 日誌法による怒り経験の鎮静化過程の検討	共著	平成 16 年 8 月	筑波大学心理学研究, 32, 31-37	日比野桂・吉田富二雄 本研究では、日誌法を用いてリアルタイムに怒り経験後の感情・認知・行動の時系列的变化について検討を行った。また、鎮静化過程を“許し”の観点から分析した。その結果、合理化、原因究明、怒りの伝達を行った際には相手を許し、社会的共有、逃避・回避、忘却を行った際に許していないことが示された。このように、怒りの対象や怒り経験と向き合い、積極的に処理しようとするのが、結果的に許しにつながる可能性が示唆された。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
42) 怒り表出行動に対する抑制要因の分析	共著	平成 17 年 2 月	筑波大学心理学研究, 33, 43-49.	日比野桂・吉田富二雄・湯川進太郎 本研究では、大学生を対象に、個人要因が怒り経験に与える影響と、怒り表出行動の抑制要因の影響に関して、検討を試みた。その結果、抑制要因としては、“人間関係の配慮”、“自己像”、“損得意識”、“規範意識”の大きく四つが抽出され、その中でも“人間関係の配慮”や“損得意識”が怒り表出の抑制要因として意識されやすかった。また、女子において、人間関係に配慮することが攻撃行動を抑制していた。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
43) オンラインゲーム利用が孤独感・敵意的認知に及ぼす影響—自己	共著	平成 17 年 2 月	筑波大学心理学研究, 33, 51-57.	藤桂・吉田富二雄 本研究では、オンラインゲーム上の行動内容と、現実生活での孤独感・敵意的認知との関連性について、ウェブ調査

の表出, 現実とのバランスの観点より—				により検討した。その結果, ゲーム上での”自己客観視”や”非日常的関与”は, 孤独感を低減させる一方で, ”没入的関与”・”依存的関与”といった不適応的なゲーム行動は, 孤独感・敵意的認知を増大させていた。すなわち, ゲーム利用による影響は, 行動内容によって異なることが示された。加えて, 現実生活のストレスは, 不適応的なゲーム行動により強められることも明らかとなった。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
44) Difference between watching and playing violent video games: The effects of play style and impression of games on aggression-related reactions.	共著	平成 17 年 2 月	Tsukuba Psychological Research, 33, 59-78.	湯川進太郎・吉田富二雄 研究 1 では, プレイスタイル (役割同化型/刺激反応型) と映像の印象 (写実型/ファンタジー型) の 2 つの観点から暴力的テレビゲームを分類した。研究 2 では, プレイスタイル×映像の印象で典型的な 4 つのゲームを選び, 更に参加水準 (プレイヤーか観察者か) の要因を加え, それらの暴力的テレビゲームが被験者の認知・感情・生理反応・行動に及ぼす影響を実験的に分析した。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
45) CMC が自己開示および印象形成に及ぼす効果	共著	平成 17 年 8 月	筑波大学心理学研究, 34, 37-43.	佐藤広英・吉田富二雄 本研究では, CMC が自己開示に及ぼす効果について, 対面状況との比較から検討した。女子大学生 32 名を対象とし, 参加者は CMC 条件と対面条件のどちらかで模擬面接を受け, 面接中の自己開示を分析した。その結果, CMC では対面条件よりも深く内面的な自己開示が行われる反面, 面接相手に対する印象形成を妨げ, それが自己報告レベルにおける自己開示の抑制へとつながる可能性が示された。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
46) インターネット上における自己開示——自己-他者の匿名性の観点からの検討——	共著	平成 20 年 2 月	心理学研究, 78, 559-566.	佐藤広英・吉田富二雄 CMC における匿名性が自己開示に及ぼす効果について, 自己の匿名性と他者の匿名性を独立して操作することで検討を行った。女子大学生 60 名を 2 (自己: 匿名 or 非匿名) × 2 (他者: 匿名 or 非匿名) の実験デザインに割り振り, 模擬面接場面における自己開示を分析した結果, 自己の匿名性は相互作用中の不安感および開示抵抗感を減少させ, 他者の匿名性は相手への親密感を減少させ, その結果, 内面的な自己開示を抑制することが示された。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
47) CMC が脱抑制的行動および自己意識に及ぼす効果	共著	平成 18 年 8 月	筑波大学心理学研究, 36, 1-9.	佐藤広英・吉田富二雄 CMC が脱抑制的行動および自己意識に及ぼす効果について検討を行った。女子大学生 60 名を 3 名ずつ 20 グループに分け, CMC 条件と対面条件のどちらかにおいて, TAT の写真を基に物語を作成するという課題を行った。脱抑制的行動を内容分析, 他者評定, 自己報告により測定した結果, CMC 条件の参加者は対面条件の参加者よりも攻撃的であり, あまり自己を演出していなかった。さらに, CMC は参

48) 潜在連合テストによるオノマトペの印象評価——SD 法との比較——	共著	平成 21 年 6 月	心理学研究, 80, 145-151	<p>加者の私的自己意識を高め、その結果、攻撃的言動を促進していた。(共同研究・執筆につき担当部分の抽出不可能)</p> <p>佐藤広英・吉田富二雄 日本語オノマトペにおける清音、濁音、半濁音の持つ印象について、潜在連合テスト (IAT) と SD 法の 2 つの方法を用いて測定した。大学生 25 名を対象とし、各参加者は 6 つの IAT 課題と SD 法のための質問紙を行った。その結果、IAT と SD 法の両方で、濁音はより動的で重的に、清音と半濁音はより静的で軽的に評価されていた。一方、半濁音と比較では異なる結果がみられた。本研究の結果、カテゴリ全体に対する潜在的評価を測定できる IAT のメリットが示された。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
49) インターネット上での行動内容が社会性・攻撃性に及ぼす影響: ウェブログ・オンラインゲームの検討より	共著	平成 21 年 11 月	社会心理学研究 25, 121-132.	<p>藤 桂・吉田富二雄 本研究では、インターネット上の行動内容と現実生活での社会性・攻撃性との関連性を検討した。ウェブログまたはオンラインゲーム利用者へのウェブ調査より、第一に、ネット上での行動内容は、「自己の表出」「他者との関係」「現実とのバランス」に大別されることが示された。第二に、“自己客観視”や“所属感獲得”は社会性の向上に結びつくものの、“攻撃的言動”や“没入的関与”、“依存的関与”は社会性の低下・攻撃性の増大をもたらすというように、ネットの影響は行動内容により異なることも示された。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
50) CMC (computer-mediated communication) が攻撃性に及ぼす効果	共著	平成 21 年 2 月	筑波大学心理学研究, 39, 35-43.	<p>佐藤広英・日比野桂・吉田富二雄 本研究では、CMC が攻撃性に及ぼす効果について、自己意識および課題志向性との関連性を含めて検討した。男子大学生 24 名を対象とし、CMC 条件と対面条件の両方で 2 つの両極的な社会問題についてディスカッションを行った。攻撃性を内容分析、他者評定、自己報告により測定した結果、対面よりも CMC において攻撃性が高いこと、CMC は公的自己意識を低下させ、課題志向性を高めること、CMC では私的自己意識と課題志向性が攻撃性を促進すること、が明らかとなった。(共同研究・執筆につき担当部分の抽出不可能)</p>
51) オンラインゲーム上の対人関係が現実生活の社会性および攻撃性に及ぼす影響	共著	平成 22 年 2 月	心理学研究 80, 494-503.	<p>藤 桂・吉田富二雄 本研究では、オンラインゲーム上での対人関係のあり方が、現実生活の社会性・攻撃性に及ぼす影響を検討した。ゲーム利用者を対象とするウェブ調査により、ゲーム上で親和的に交流している場合は、現実生活の社会性は促進される一方で、ゲーム上で攻撃的・反規範的に振舞う場合は、社会性は低下し、攻撃性は増大することが示された。加えてゲーム利用は、社会志向的な者にはポジティブな影響をもたらすが、そうでない者にはネガティブな影響をもたら</p>

52) 楽観性がリスク認知, 犯罪不安, 防犯行動へ及ぼす影響	共著	平成 22 年 8 月	筑波大学心理学研究, 40, 9-19.	<p>すことも示唆された。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p> <p>荒井崇史・吉田富二雄 本研究では、楽観性が犯罪不安や防犯対策に及ぼす影響を検討するために大学生を対象に質問紙調査を行った(男性133名, 女性216名)。分析の結果, 犯罪不安については, 男性よりも女性の方が全般的に高い一方, 楽観性については男女とも中間的な値で差が見られなかった。また男性でのみ, 楽観性が犯罪不安の減少を, マス・メディアが犯罪不安の増大をもたらしていた。さらに男女とも, 物事をポジティブに考える楽観性は, 援助期待や防犯対策を促すことが明らかとなった。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
53) 犯罪情報が幼児を持つ母親の犯罪不安に及ぼす影響	共著	平成 22 年 10 月	心理学研究, 81, 397-405.	<p>荒井崇史・藤桂・吉田富二雄 本研究では、犯罪情報への接触が、視聴内容に対する受け止め方を介して、社会的水準・個人的水準の犯罪不安、そして防犯対策に影響を及ぼすという因果モデルの検討を行うために、幼児の母親を対象にクローズ型ウェブ調査を実施した(N=1040)。分析の結果, 犯罪情報への接触は、視聴内容からインパクトを受ける過程を通してのみ犯罪不安を高め、犯罪不安の中でも特に、社会的水準の認知や感情が地域連携的な対策を促すことが示された。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
54) 集団成員への関下単純接触が集団間評価に及ぼす効果—IAT を用いて—	共著	平成 22 年 10 月	心理学研究, 81, 364-372.	<p>川上直秋・吉田富二雄 本研究では、最小条件集団パラダイムに基づく、内集団・外集団成員への関下単純接触が集団間評価に及ぼす効果を、Implicit Association Test (IAT) を用いて検討した。実験の結果, 単純接触効果が見られたのは、内集団に接触した場合のみであった。すなわち、無意識的な内集団意識を媒介とし、内集団の評価を高める方向でのみ単純接触効果が生じたことを示唆する。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>
55) 単純接触がカテゴリ評価に与える効果—IAT と GNAT を用いて—	共著	平成 22 年 12 月	心理学研究, 81, 437-445.	<p>川上直秋・佐藤広英・吉田富二雄 本研究では、共通のカテゴリに属する刺激への反復接触がカテゴリ評価に与える効果を、間接的な測定方法を用いて検討した。一連の実験では、実験参加者はひらがなあるいはカタカナで表記された日本語擬態語に反復接触した後、自己報告と IAT あるいは GNAT による好意度測定が行われた。その結果, 接触と評定で刺激が同一という従来の単純接触効果は、自己報告と IAT の両方で認められたものの(実験1), 般化の効果は IAT (実験2) と GNAT (実験2) の場合のみ認められた。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)</p>

56) 新たな自己愛傾向尺度の作成と妥当性の検討—過去の経験との関連を通して—	共著	平成 23 年 2 月	筑波大学心理学研究, 41, 25-32.	三浦絵美・吉田富二雄 大学生を対象とした質問紙調査(有効回答数 531 名)により、新たな自己愛傾向尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。因子分析により、「誇大感」「自己本位性」「評価への敏感さ」「賞賛欲求」の 4 因子が得られ、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求尺度、ポジティブ経験・ネガティブ経験、帰属傾向などの尺度との関係から妥当性の検証を行った。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
57) 多面的単純接触効果—連合強度を指標として—	共著	平成 23 年 12 月	心理学研究, 82, 424-432.	川上直秋・吉田富二雄. 関下単純接触効果における刺激の多様性の効果を 2 つの実験で検証した。刺激は女性の顔写真を用いて、第 1 実験では、7 角度の刺激を用いて知覚方向の多様性、第 2 実験では、7 表情の刺激を用いて、感情の多様性が操作された。潜在指標 (GNAT) の分析の結果、表情多様性が関下単純接触における有意な促進効果を示した。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
58) 関下単純接触の累積的効果とその長期持続性	共著	平成 23 年 10 月	心理学研究, 82, 345-353.	川上直秋・吉田富二雄 (2011). 関下単純接触における刺激の累積提示の効果を実験的に検証した。刺激はキャラクター人形で、1 日 20 回 5 日間連続して関下接触させる累積提示条件と、1 日 100 回接触する集中接触条件が設定された。効果測定は翌日から 3 ヶ月後まで 6 回繰り返された。その結果、累積接触では、3 ヶ月後でも効果の低減が見られず、安定した効果が維持されることが確認された。さらに刺激の多様性の要因を加えると、関下単純接触効果が強まることが明らかになった。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
59) 高校生向け心理学出前実験の試み—大学院生メディアータープロジェクトの挑戦—	共著	平成 23 年 8 月	筑波大学心理学研究, 42, 29-34.	川上直秋・吉田富二雄 (2011). 日常生活の疑問から出発して、問題を設定し、実験や調査(科学的方法)によって、答えを得る。そうした心理学研究の特徴を単純接触効果実験を例として解説した。さらに刺激の関下提示 (priming) により無意識を実験的に扱う方法を紹介。高校生の心理学に対する興味を引き出す授業のあり方と、問題点を検討した。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
60) 出身地ステレオタイプ喚起情報が対人魅力に及ぼす効果—形容詞による人物刺激を用いて—	共著	平成 24 年 2 月	筑波大学心理学研究, 43, 37-42.	松尾藍・吉田富二雄 ステレオタイプ喚起情報が、ステレオタイプ一致・不一致人物の評価に及ぼす効果を、出身地ステレオタイプを用いて、実験的に検討した。ステレオタイプ一致・不一致の操作は形容によるプロフィールで行った。不一致人物はステレオタイプ喚起条件で、よりネガティブに評価されると予想されたが、有意な効果は見られなかった。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)

61) The Pursuit of Self-Interest and Rule-Breaking in an Anonymous Situation	共著	平成 25 年 3 月	Journal of Applied Social Psychology 43, 909-916.	Nogami, T., & Yoshida, F. Internet 上に完全匿名状況を設定して、匿名化における規則逸脱行動の生起を実験的に検証した。逸脱行動は自己利益と匿名性がある場合、一定の割合で生起した。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
62) 色彩の潜在的イメージ評価：IAT, GNAT を指標とした色彩と感情の関連	共著	平成 25 年 3 月	筑波大学心理学研究, 45, 57-70.	永田絵梨・藤桂・吉田富二雄 色彩の潜在的イメージを評価するために3つの実験を行った。第1実験ではIAT(潜在連合テスト)第2実験ではGNATをもちいて色彩の潜在的イメージを活動性と力量性の2次元について調べた。第3実験では、閾下プライミングを用いて色彩が人物の印象に及ぼす潜在的影響について分析した。(共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
63) 犯罪及び防犯に関する情報探索の規定因：インターネット上の情報探索	共著	平成 25 年 3 月	心理学研究, 84, 83-92.	荒井崇史・藤桂・吉田富二雄 本研究では、幼児の母親を対象にクローズ型ウェブ調査を実施し(N=1040)、犯罪と犯罪予防のために行う情報探索活動を分析した。SEM分析の結果、地域社会の対人ネットワークの大きさが、安全に関する会話を通して、地域社会の責任意識や防犯情報への探索行動を促進することが明らかになった。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
64) 閾下単純接触による潜在的集団評価の形成：異質性の無意識的認知	共著	平成 25 年 3 月	認知科学 20, 318-329.	川上直秋・吉田富二雄 閾下単純接触が集団の潜在的評価に及ぼす影響を、集団メンバーの典型性の割合を操作することで、実験的に検討した。その結果、異質なカテゴリーメンバーの存在(3割程度)が集団カテゴリーをの顕在化を促すこと、そうした効果は潜在的レベルで生起することが明らかになった。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
65) 字のクセを好きになるか？：筆跡に基づく単純接触効果の般化	共著	平成 26 年 3 月	社会心理学研究 29, 187-193.	川上直秋・菊地正・吉田富二雄 手書き文字(ひらがな)を刺激として、単純接触効果の般化が「字のくせ」の水準で生起するかを実験的に検証した。その結果、単純接触効果は、同一文字刺激>異文字刺激の順で、般化の効果がみられら。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
66) ネットいじめ被害者における相談行動の抑制-脅威認知の観点から-	共著	平成 26 年 3 月	教育心理学研究 36, 25-34.	藤桂・吉田富二雄 高校生・大学生対象の予備調査(8171名)より、283名(3.5%)を抽出し、いじめ経験と被害児の脅威認知等について尋ねた。脅威認知は、孤立性・不可避性・波及性の3因子からなり、いじめ被害による脅威認知が、無力感を経て相談行動を抑制していることが明らかになった。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能) H26年度教育心理学研究・優秀論文賞を受賞。

67) How do implicit effects of subliminal mere exposure become explicit ? : Mediating effects of social interaction.	共著	2015 平成 27 年	Social Influence, 10, 43-54.	Kawakami,N., and Yoshida, F. 連続的動きからストーリーを認知する、この高度な精神機能が人間の意識下においても機能していることを、閾下プライミングと IAT (潜在連合テスト) を用いて実験的に明らかにした。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
68) Perceiving a story outside of conscious awareness: When we infer narrative attributes from subliminal sequential stimuli.	共著	2015 平成 27 年	Consciousness and Cognition 33,53-66.	Kawakami, N., and Yoshida, F. 潜在的に導入された態度は、本人が気が付かないが、同じ態度を植え込まれた二者が相互作用することで、顕在化することを、閾下プライミングと AMP (感情誤帰属法) を用いて実験的に明らかにした。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
69)情報に対する批判的思考態度が充実感およびキャリア意識に及ぼす影響	共著	2018 平成 30 年 3 月	東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学研究 18	井上侑美・吉田富二雄 本研究では、大学生・大学院生・社会人 (30 歳前後) を対象とした調査を行い、批判的思考態度・私的自意識、及び開放性・誠実性の諸変数がキャリア意識・充実感にどのような影響を与えるかを検討した。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
70)自己受容の概念と測定方法の検討ー「ありのままの自己」を受け入れるとは何かー	共著	2019 平成 31 年 3 月	東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学研究 19	伊藤翼・吉田富二雄 本研究では、自己認知と自己評価を自己受容の前提条件とする 2 種類の異なる自己受容尺度を用いて、両者の構成概念妥当性を検証した。また、大学生対象の調査で、自己受容に影響する要因と影響される要因についても検討した。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
71)日常的スキルとしてのレジリエンスーレジリエンス・スキル尺度の作成と妥当性の検証ー	共著	2020 令和 2 年 3 月	東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学研究 20	上村依子・吉田富二雄 本研究では、レジリエンスを導く要因とレジリエンスを媒介するものとして「レジリエンス・スキル」という概念を導入し、社会人 (145 名) を対象に質問紙調査を行った。 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)
(その他)				
1) 大都市高校生の心理的特徴と生活環境	共著	昭和 54 年 9 月	東京都都民生活局	堀洋道 (編著) 昭和 53 年度東京都青少年問題調査報告書 吉田は、家庭環境(1) (2) (Pp. 96-124) を執筆。
2) 大都市高校生の性をめぐる意識と行動	共著	昭和 57 年 9 月	東京都生活文化局	堀洋道 (編著) 昭和 56 年度東京都青少年問題調査報告書 吉田は、心理的特徴と性行動 (Pp. 149-158) を執筆。
3) コンピュータネットワーク上におけるアイデア生成と感情の交流	共著	平成 10 年 3 月	文科省	研究代表者として執筆。141 頁。 共著者は、吉田富二雄・安念保昌・遠藤公久 平成 8・9 年度文部省科学研究費補助金 (課題番号 08610104) 基盤研究 C 研究成果報告書 (共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能)

4) 暴力映像が視聴者の感情・認知・生理反応に及ぼす影響	共著	平成 11 年 3 月	文科省	研究代表者として執筆。129 頁。 共著者は、吉田富二雄・遠藤公久・湯川進太郎 平成 9・10 年度文部省科学研究費補助金（課題番号 09610100）基盤研究(C)(2) 研究成果報告書 （共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能）
5) 暴力的テレビゲームと怒り感情のコントロールに関する実験的研究	共著	平成 14 年 3 月	文科省	研究代表者として執筆。103 頁。 共著者は、吉田富二雄・小玉正博・湯川進太郎・日比野桂 （平成 12・13 年度文部科学省科学研究費補助金（課題番号 12610106）基盤研究(C)(2)研究成果報告書） （共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能）
6) 怒り経験における怒り感情の鎮静化および許し (Forgiveness) の過程	共著	平成 17 年 3 月	文科省	研究代表者として執筆。155 頁。 共著者は、吉田富二雄・小玉正博・湯川進太郎 （平成 15・16 年度文部科学省科学研究費補助金（課題番号 15530395）基盤研究(C)(2)研究成果報告書） （共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能）
7) インターネット行動と攻撃性の分析	共著	平成 20 年 3 月	文科省	研究代表者として執筆。153 頁。 共著者は、吉田富二雄・小玉正博・湯川進太郎 平成 18・19 年度文部科学省科学研究費補助金（課題番号 18530476）基盤研究(C)研究成果報告書 （共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能）
8) インターネット上の攻撃性と規範の形成	共著	平成 23 年 3 月	文科省	研究代表者として執筆。94 頁。 共著者は、吉田富二雄・菊地正 平成 20・21・22 年度文部科学省科学研究費補助金（課題番号 20530564）基盤研究 (C)研究成果報告書 （共同研究・執筆につき本人担当部分の抽出不可能）
9) 「攻撃的情報の累積的影響：関下刺激実験およびネットいじめ行動の調査を通して」	共著	平成 26 年 3 月	文科省	（研究代表：吉田 富二雄） 研究分担者は、吉田富二雄・湯川進太郎・藤 桂 （文部科学省科学研究費：平成 23・24・25 年度基盤研究（c） （課題番号 23530811）